

# やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

「ザザンザ」浜松の音は「ザザンザ」という囃子言葉がある。狂言にも登場し、「法師母」では、冒頭シテが「ぎざんぎざん松の音はぎざんぎ」と謡い、「アアよした、よした。殊の外たへようた」と語る。酒を飲む場面でも登場する狂言歌謡の一つでもある。

この「ザザンザ」を県東北部の秋祭りなどで何度も耳にしたことがある。奈良市柳生町は、上町と下町に分かれ、それぞれに最年長者12人ずつでジユウニン衆という祭祀集団を作っている。隔年交代で氏神八坂神社の祭祀を担当し、その年の祭祀担当のジユウニン衆の中から、ネギと呼ばれる神主役と秋祭りのトーヤが選ばれる。選ばれた



奈良市柳生のトーヤでの酒宴—1986年10月17日撮影、筆者提供

家では、祭り当日朝から盛大な祝宴を催す。三つのマイと呼ばれる神事芸能が一通り披露され、その

のあと酒宴に移る。ネギの前には、積み重ねた武蔵野と呼ばれる盃が置かれている。まず一座に廻す盃を決める。「一番大きいので」「いや一番小さいのでいこ」と意見が出る。最後は中を取って真ん中となる。ネギ役の男性を正座に据え、年齢順に一同が座るなか、トーヤの長男などの酌人が酒を注ぐ。受けた人は少し口を付け、「サカナくれ」と所望する。すると一座の中から伊勢首頭が歌われる。賑やかで楽しい一節だ。終わると再び酌人が酒を注ぎ足す。この時周囲から、「ザザンザー、浜松の音はザザンザー」と囃す。酒を注ぐと、遠くの松林を吹く風の音が聞こえて来そうだ。こうして歌を肴に通る盃が回る。昔からの酒宴の形式が、宮座行事の中に伝わっている珍しい事例だ。

奈良市狭川地区には、面町と西町の一部の家で構成される西西敬神講という祭祀集団が、秋祭りに古くから伝わる神事芸能を奉納する。この集団は、年に一回、春先に「大参会」という総会を行う。ここでも盃事で「ザザンザ」がある。狭川では、肴は謡の一節となる。山添村ではこうした謡とともに酒を飲む習慣を「謡酒盛」と呼んでいる。

このザザンザの囃子は室町幕府六代将軍足利義教が、富士山を見に下向し、松の下で酒宴を催した時の歌だという。武家に伝わった酒宴の作法なのだろう。ザザンザの囃子には、松風の音だけでなく潮の香りがするような気がする。コロナ禍が生み出した画面越しのオンライン飲み会より、やはりこの方がいい。

(奈良民俗文化研究所代表)

次回は6月10日

## 酒宴の一節「ザザンザ」